高澤先生のご退職にあたって

加　藤　茂　夫
経営学部教授

高澤十四久先生が本学専修大学経営学部に着任されたのは昭和56年４月のことである。29年の歳月があっという間に流れた。小生が着任したのは昭和52年であり，その間ずーと一緒に経営学部の教育・研究を共にしてきた。経営学部が発足したのは昭和37年であり，平成23年には50年の節目を迎える。日本においても古い歴史と伝統をもつ経営学部創立30年，40年のイベントの中心としてご尽力され，経営学部の屋台骨として先生の貢献は大なるものがあった。

特に教育面で特記できることは大学院生の指導である。小生の院生をどれだけサポートしてくれたか分からない。修士論文作成に関して構想段階，目次の論理展開，テーマの学問的レベルの上位志向性等本当に小生の見落としていた点をクリアにし，指摘してくれたことに対し，この場をお借りして感謝したい。留学生にも好かれ，多くの結婚式にも参列してくれた。

高澤先生は小生の好きなC.I.バーナード理論の日本におけるトップレベルの研究者である。M.P.フォレットはじめその一連の研究領域において多くの著述があり，多くの研究者と研究会を主宰され，その研究領域と産業界への応用を普及された功績は賞賛に値しよう。

さて，高澤先生はそのお名前が十四久（としひさ）つまり昭和14年生まれである。良いネーミングだな，といつも感心し，小生とはいくつ違うかを簡単に計算できる。８歳の開きであるがその間隔を感じさせないほどお若く見えるから不思議だ。小生よりも若く見えるのは頭の上のものだけではなく，バイタリティがある点だ。その一つは小生が高澤先生から教わり

なかなか実践できないことと関連がある。それは答案の採点にしても論文にしてもまた，やらなければならないことに対して素早く成し遂げるということだ。極めて単純なことであるが小生にはなかなか難しい。しかし，髙澤先生はいとも簡単にやっつけてしまうのである。多分まだまだ心身ともに若いからだろう。「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ」とサミュエル・ウルマン「青春」（岡田義夫訳）の証左であろう。

さて，先生は信念の人である。研究会での議論，また普段の言説において垣間見ることは決して自説を曲げないということである。悪く言うと頑固であるということであるが長い間のお付き合いから考えると信念から来る思想，思い，考えからだということが分かる。しかし，納得すると柔軟に対応してくれる。

小生が経営学部長を退任し，病魔と闘っている時にお見舞いに来てくれた。大変感謝しており，気持ちの優しい人なんだなと改めて認識した。お見舞いにD.A.レン，佐々木恒男監訳「マネジメント思想の進化」文真堂，平成15年をプレゼントしてくれた。髙澤先生らしい一面である。520ページを超える大著である。病室では読むことが出来なかったことは当然であるが今での書斎の書棚に置いてあり，その時のことを髣髴とさせている。もちろん髙澤先生がその訳に関わったわけであるが，その訳者の１人として小生の学部のゼミから髙澤先生の研究室に進んだ杉田　博君の名が刻まれていたことは望外の喜びであった。このように髙澤先生の思いと人脈の広さが人材・研究者育成に大いに寄与していることをご紹介し，先生の今後の人生が豊かでありますよう心よりお祈りする次第であります。